大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2011 年 3 月

四天王寺周辺の参道を中心とした空間変容に関する研究

-店舗と路上店舗による参道化に着目して-

都市計画分野　　竹中直道

Abstract

近年、中心市街地活性化として都市空間に賑わいをもたらすことが重要視されている。四天王寺の参道は、日常では沿道店舗と住居によって構成されているが、縁日では沿道店舗が建物前面に商品のはみ出しを行い、路上店舗の出店による物的環境の変化より賑わいのある空間が作り出されている。そこで、本研究では、四天王寺の参道における縁日の沿道店舗の商品のはみ出しと路上店舗の出店による空間構成と業種構成の変化を参道化と定義し、①中世から近世の四天王寺周辺の市街地の変容と参道空間の形成過程、②近代以降の四天王寺周辺の市街地と参道の変遷、③四天王寺の参道における空間変容、④沿道店舗と路上店舗の実行主体と商品のはみ出し時期等から、都市空間に賑わいをもたらしている四天王寺の参道化の実態を明らかにした。

0.序章

0-1.研究の背景

近年、中心市街地活性化として都市空間に賑わいをもたらすことが重要視されている[1)]。

そういった経緯の中、大阪の四天王寺では、毎月２１日に縁日が催され、四天王寺の参道は、人々が集い賑わいのある空間がつくり出されている。この通りは、日常は沿道店舗と住居によって構成されているが、縁日時は沿道店舗が前面に商品のはみ出しを行い、また路上店舗の設置による物的環境の変化によって参道化している（図 0-1.1）。

四天王寺は創立以降、信仰の隆盛によって門前町が形成され、賑わっていた[2)]。近代に入り、交通インフラの発達によって、四天王寺周辺の市街地は大きく変化するが、今日でも縁日になると沿道店舗と路上店舗により賑わいのある空間に変化する。こうした四天王寺の参道には、日常的な「地元商店街」としての性格と、非日常的な「盛り場」としての性格が混在しており、多様な空間が創出されている。このような都市空間での賑わいは、今日の大きな課題とされている中心市街地活性化をはじめてとして、都市に賑わいをもたらす上で重要である。

0-2.研究の目的

日常と縁日において、沿道店舗、路上店舗によって物的環境が変化する四天王寺の参道に着目し、周辺市街地の形成と変容より、参道と空間構成の変遷を分析する。また、縁日における四天王寺参道の沿道店舗、路上店舗とその実行主体との関係性から、参道化の実態を明らかにすることを目的とする。

図 0-1　縁日時に商品のはみ出しを行う沿道店舗

0-3.研究の方法

本研究では「参道化」を「縁日における沿道店舗による商品のはみ出し、路上店舗の設置による空間構成の変化と宗教用具などの参道として機能する店舗の出店による業種構成の変化」と定義し、以下のように進める。

1 章では、中世から近世の四天王寺周辺の歴史的変容について、文献・図絵・地図等を用い、四天王寺周辺市街地の形成過程と参道の空間構成を把握する。2 章では、近代以降の四天王寺周辺の市街地の歴史的変容について、近代の開発によって四天王寺周辺環境の変化と参道の変遷を把握する。近代以降の四天王寺の参道について土地利用変遷を把握する。3 章では、現在の四天王寺の参道において、縁日における商品のはみ出し、路上店舗の業種、店の造り、はみ出しタイプの類型化により、業種構成、空間構成の変化を把握する。また商品のはみ出し行為、路上店舗の実行主体にヒアリング調査を行い、分析を行う。

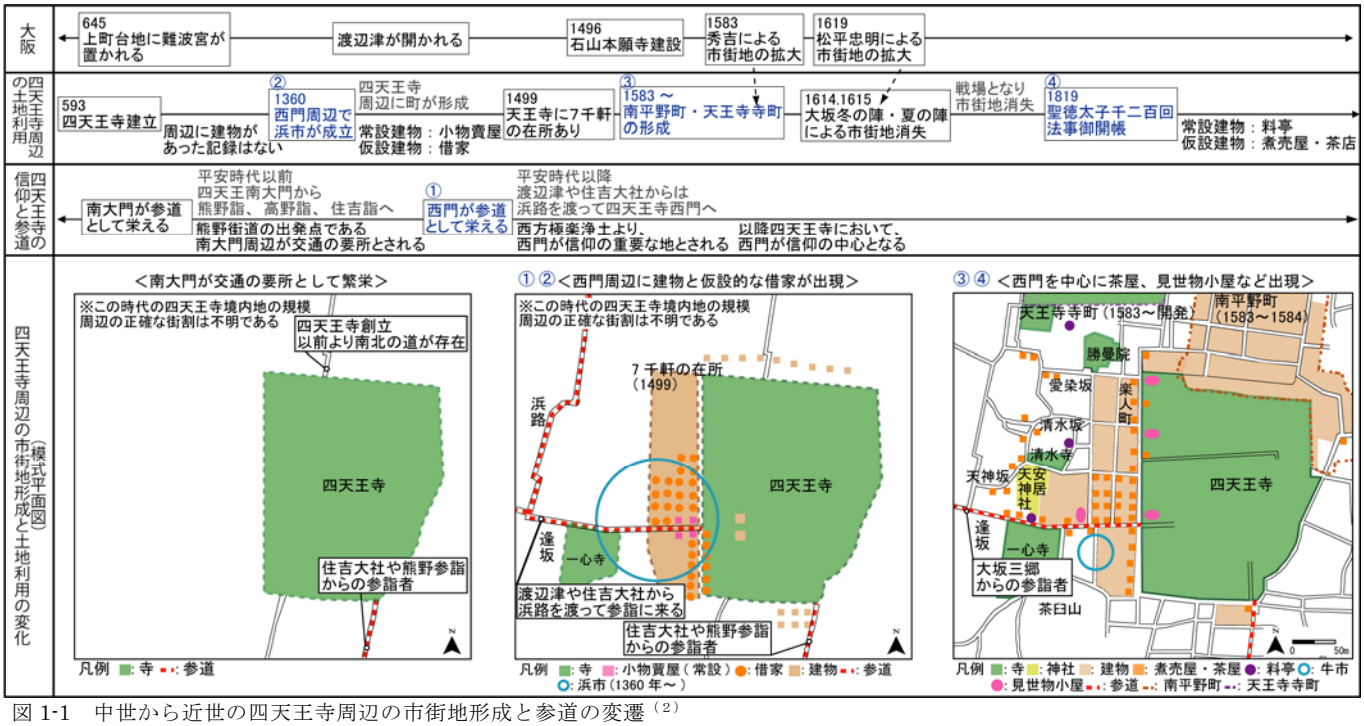

図 1-1　中世から近世の四天王寺周辺の市街地形成と参道の変遷（2）

1.中世から近世の四天王寺周辺の市街地の歴史的変容

中世から近世の四天王寺周辺の市街地形成と参道の変遷についてまとめた（図 1-1）より、四天王寺の歴史的変容が確認できた。

四天王寺周辺市街地と参道が変化しながら常設的な建物と仮設的な建物によって参道空間として賑わっていた背景には、①四天王寺の西門信仰の隆盛、②周辺の町並み形成と浜市の成立、③市街地拡大、寺町の形成による一体化、④聖徳太子千二百回聖忌御法事御開帳による賑わい、といった 4 つの背景があったことがわかった。

①平安時代以降四天王寺の西門信仰が流行するにつれて、賑わいの中心が西門周辺へと変化していった[3]。そのため、創立当初は南大門が四天王寺の参道として使用されていたが、西門が四天王寺の主の参道となった。②西門信仰の隆盛につれて、四天王寺西門周辺には建物が建ち並ぶようになった[4]。この町並みの形成と、交通の要所という背景により、大規模な浜市が成立し、四天王寺周辺は、常設的な商店と仮設的な借家を利用した商工業者によって、賑わっていた[5]。こうした市街地の形成によって 1499 年には、天王寺に 7 千軒の在家ありといわれるほど[6]、大規模な町並みを形成した。

③その後、近世初期において、豊臣秀吉・松平忠明による市街地拡大が実施された。大阪城から四天王寺まで町屋による一体化、また、大阪市中の寺院の移転廃合により、四天王寺周辺には、寺町が形成され、四天王寺は都市外縁部として更に外側に位置していた[7]。こうして近世の四天王寺周辺の市街地の骨格はできあがった。④江戸末期において、四天王寺周辺の門前町繁栄の中心は、遊客化した参詣者に対応して、高台西岸の景勝地である相坂などの各坂筋に発達した煮売屋・茶店・料亭の行楽的な町並みであった[8]。聖徳太子千二百回聖忌御法事御開帳では、四天王寺周辺には茶店・見世物小屋など仮設的な建物が立ち並び、行楽的な町並みに加え、より一層賑わいのある空間をつくっていた[9]。

2.近代以降の四天王寺周辺の市街地の歴史的変容

2-1.近代以降の四天王寺周辺の市街地形成と参道の変遷

近代以降の四天王寺周辺の市街地形成と参道の変遷についてまとめた（図 2-1）より、四天王寺の歴史的変容が確認できた。

四天王寺周辺市街地と参道が変化しながら現在の参道が形成される背景には、①大阪市電の開通、②都市計画事業による幹線道路の開設、③戦災による市街地の消失、④戦後の開発と市電の廃止、といった 4 つの背景があったことがわかった。

①近代において、大阪市内では大阪市電事業など鉄道が開通し、交通のインフラの発達が進んだ。四天王寺周辺では、天王寺駅と四天王寺西門駅が開設され[10]、以前までは逢坂を通って参詣されていたが、周辺の駅から四天王寺までが参道に変化した。

②更に、都市計画事業によって四天王寺周辺には、幹線道路が開設された。これによって、四天王寺は幹線道路に囲まれ、現在の参道沿いの店舗のいくつかは、立ち退きを強いられ、街区も大きく変化した。

③大阪市内は戦災による被害が大きく、それは四天王寺周辺でも同様であった。四天王寺周辺では全焼ではなく、椎寺町東側半分は戦前の建物が残っていた。

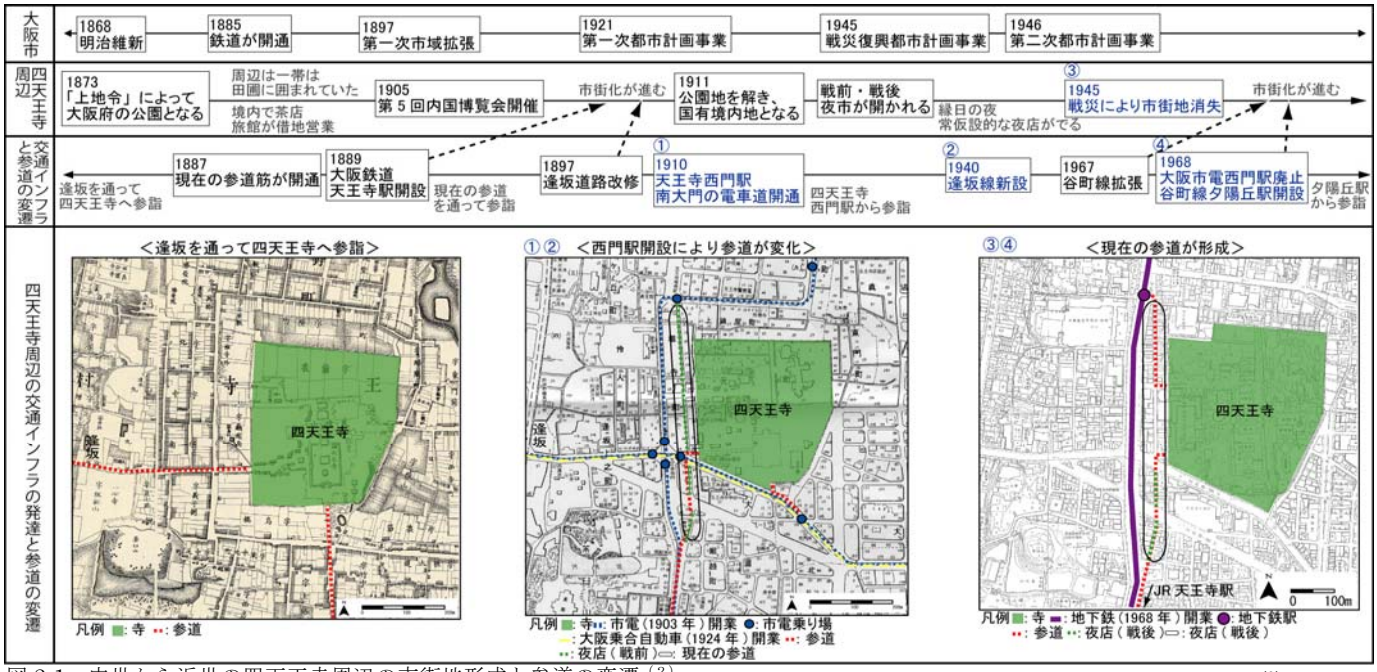

図 2-1　中世から近世の四天王寺周辺の市街地形成と参道の変遷 (2)

焼けてしまった西側は現在高層ビルが建ち並んでおり、現在の参道を形成している要因となっている。

④四天王寺西門前駅は廃止され、地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘駅が開設されたことによって、四天王寺への参道は南北の筋へと変化した[11]。

このように近代に入り、交通インフラの整備等によって四天王寺周辺は開発され、現在の四天王寺周辺の市街地と参道が形成される過程を確認できた

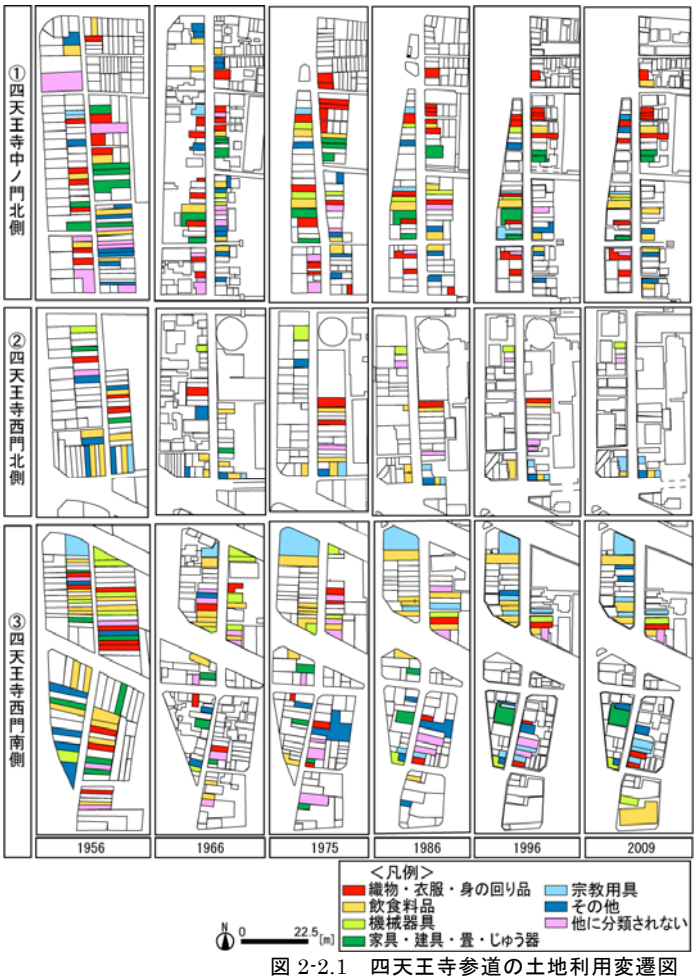

図 2-2.1　四天王寺参道の土地利用変遷図

2-2.近代以降の四天王寺参道の土地利用変遷(3)

近代以降参道として使用されている①四天王寺中ノ門前北側②四天王寺西門前北側③四天王寺西門前南側（以下　中ノ門北側、西門北側、西門南側とする）の 3 地区を対象地区とし、エリア毎に土地利用変遷をまとめ（図 2-2.1,図 2-2.2）、分析を行った(4)。

①中ノ門北側は地下鉄の影響を受け用途が変化している。近年の傾向として、「織物・衣服・身の回り品」「飲食料品」が占める割合は増加し、全体の 50 % を占めており、中ノ門北側は衣類、飲食品の店舗が多い通りとなっている。

② 近年の傾向として、用途の割合に大幅な変化は見られないが、建物数が減少しており、西門北側は、建

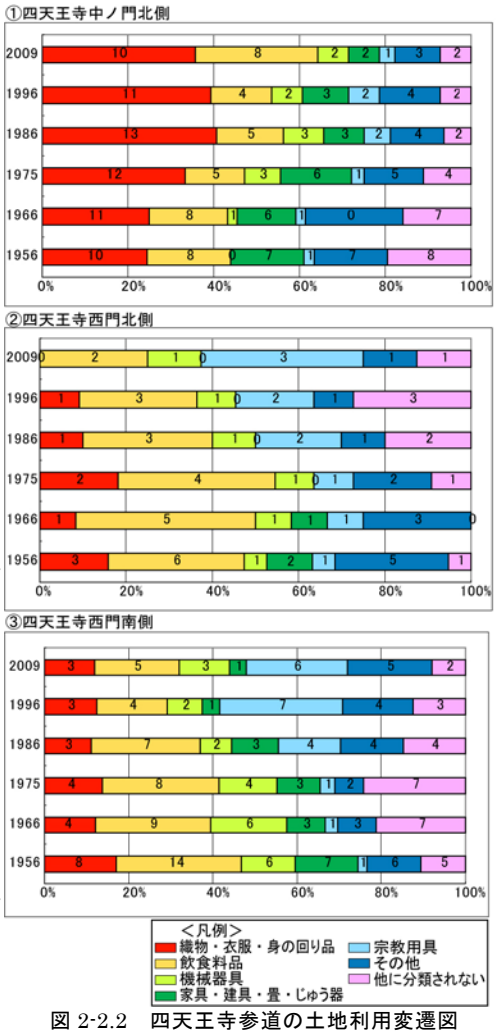

図 2-2.2　四天王寺参道の土地利用変遷図

物が大規模化し､建物軒数が減っていることが分かる。全体を通して｢飲食料品｣が全体の 20%を占めており、近年の傾向として「宗教用具」が増加している。西門北側は飲食品、宗教用具の店舗が多いと通りとなっている。③全体を通して「飲食料品」が全体の 20%を占めており、また、近年の傾向として「宗教用具」「その他」が増加しており、西門南側は参道として機能する店舗が多い通りとなっている。

3.四天王寺における参道の空間特性

3-1.調査概要

(1)調査対象地区の概要

対象地区は、大阪府大阪市天王寺区の JR 天王寺駅から四天王寺までの街路と地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘駅から四天王寺西門への街路である。

毎月 1 回（21 日）催される四天王寺の縁日においては、対象地区に終日店舗のはみ出しや露店が設置される。またこれに併せて四天王寺の境内でも骨董市やフリーマーケットが催されるなど、地区の広い範囲で縁日空間がつくり出され、賑わいのある景観をもたらしている。

図 3-1.1　調査概要案

(2)調査内容

本調査ではその評価基準として、日常と縁日における物的環境の変化について、商品のはみ出しを「建物の正面に位置し、一階壁面より外側へ商品を陳列しているもの」、路上店舗を「建物の正面に位置せず、商品を陳列するもの（図 3-1.2)」と定義し、縁日における商品のはみ出しと路上店舗の分布に応じて、3 つのエリアを設定し、この各エリアについて日常と縁日に調査を行った[5]。また、四天王寺の参道沿いの建物使用者にヒアリングを行った[6]。

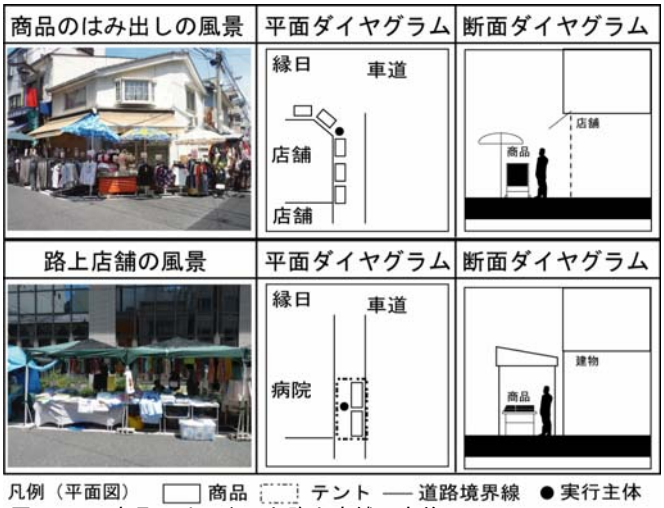

図 3-1.2　商品のはみ出しと路上店舗の定義

3-2 調査エリアの実態

(1)商品のはみ出し、路上店舗の業種と出店数

日常と縁日における業種と出店数を（表 3-2.1）（表 3-2-2）にまとめた。縁日では、特に衣類のはみ出しが見られ、全体の約 2 割を占めている。また、その他の飲食良品小売業のはみ出しは、顕著に増加している。8 月の縁日と 12 月の縁日において､商品のはみ出しと路上店舗の出店数、業種数が変化しており、縁日に決まった出店がされていない。

表 3-2.1　業種と店舗数

店舗数 / 業種	8/21		8/28	12/21		1/18
呉服･服地･寝具	2	2	1	3	2	1
婦人･子供服	6	0	3	7	0	2
靴･履物	1	1	0	1	1	0
その他の織物･衣服･身の回り品	3	2	2	2	2	1
野菜･果実	0	1	0	2	1	0
酒	1	0	0	2	0	0
菓子･パン	5	1	3	6	2	4
その他の飲食料品	8	6	1	7	5	2
家具･建具･畳	1	0	1	1	0	1
じゅう器	3	1	1	3	1	1
宗教用具	8	1	7	10	1	7
医薬品･化粧品	1	0	0	2	0	0
書籍･文房具･時計･眼鏡	1	0	1	1	1	1
花･植木	2	1	1	5	2	1
他に分類されない	2	1	1	6	1	1
経木用の机とイス	3	0	0	4	0	0
合計	47	17	22	62	19	22

<凡例>
織物・衣服・身の回り品
飲食料品
機械器具
家具・建具・畳・じゅう器
宗教用具
その他
他に分類されない

※数値は、「黒」は商品のはみ出し、「赤」は路上店舗を示す
また、数値は採用している店舗数を示す

(2)店の造り

四天王寺で見られる店の造りは 4 種類である[3]。(図 3-2.1）日常、縁日と共通して、ラックタイプを採用する店舗が多い。また、縁日時では、ビタタイプ、小店タイプの増加が見られた。出店数、業種数同様、店の

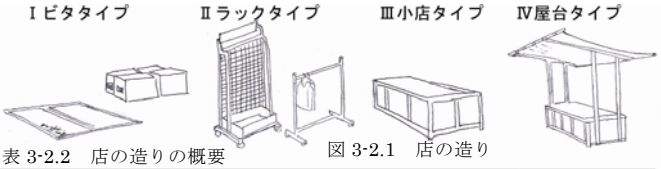

図 3-2.1　店の造り

表 3-2.2　店の造りの概要

店の造り	概要	8月 21日	8月 28日	12月 21日	1月 18日
Ⅰビタタイプ	組立式の装置を使わない形式で、地面に置くように作られた仕掛けのもの。四天王寺おいては、ダンボールに商品を入れて陳列されるものが多い。ラックタイプや、小店タイプとの組み合わせが普通である。	8 5	2	14 4	2
Ⅱラックタイプ	商品をそこに入れたり立て掛けたりするもの。商品を仕掛けたまま､直接街路に出される場合が多い。ビタタイプ（ダンボール）と組み合せが普通である。	18 1	12	23 1	12
Ⅲ小店タイプ	組立式の台を使い、三寸より小さな台を使用したもの。常設型に多く、飲食良品小売業で使用されることが多い。	19 3	9	26 3	9
Ⅳ屋台タイプ	台と天張りを一緒に使用したもの。四天王寺においては、飲食料品小売業、花・植木小売業、宗教用具小売業が採用している。	3 8	0	4 13	0

※数値は、「黒」は商品のはみ出し、「赤」は路上店舗を示す
また、数値は採用している店舗数を示す

3-3 商品のはみ出しと背後の建物用途と類型化

縁日時における沿道店舗の変化を商品のはみ出しと建物用途について把握する。そこで、出店数の多かった 12 月 21 日と 1 月 18 日を対象とし、商品のはみ出しと背後の建物用途を把握した。商品のはみ出しと背後の建物用途との関係性より、類型化を行った（図 3-3）。商品のはみ出しタイプは①はみ出し（店舗）②はみ出し(店舗以外)③建物前面の貸し出しの３つのタイプに類型化できた。①は、主に店舗の商店主が商品のはみ出しを行うタイプで、共同で販売している場合も見られた。②は、小売業の店舗以外の建物または、非利用（住居・倉庫など）の建物からのはみ出しタイプである。③は、建物の使用人に建物の前面を借り、商品のはみ出しを行うタイプである。四天王寺の参道で見られる商品のはみ出しタイプは以上の３つのタイプであった。

図 3-3 商品のはみ出しタイプ

3-4 各エリアにおける業種構成の変化

縁日時における沿道店舗と路上店舗による業種構成の変化について把握する。そこで、出店数の多かった 12 月 21 日と 1 月 18 日を対象とし、沿道店舗による商品のはみ出しの業種と路上店舗の業種について把握した。図 3-4 より、①中ノ門北側では、「織物・衣類・身の回り品」「飲食料品」の増加しており、②西門北側では、「宗教用具」の増加を除き、日常と縁日では業種の変化はあまり変化がなかった。③西門南側では「飲食料品」「宗教用具」「その他」増加が見られ、このように縁日において、各エリアで業種構成の変化が確認できた。

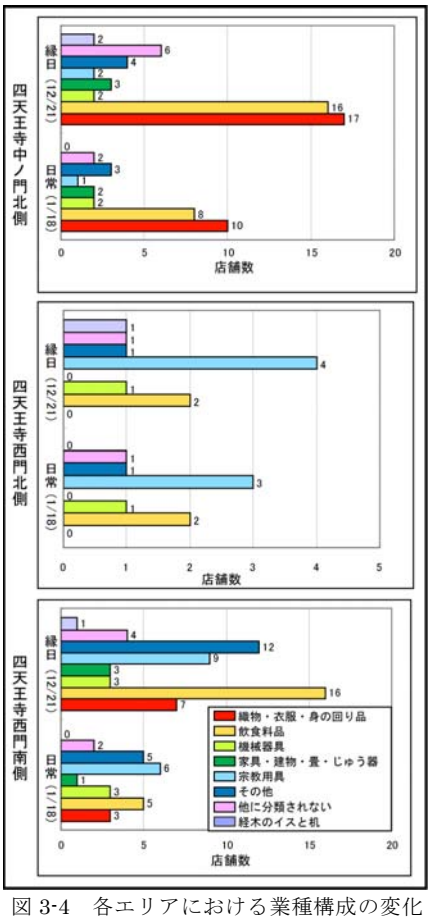

図 3-4 各エリアにおける業種構成の変化

3-5 各エリアの空間構成の変化と実行主体

ヒアリング調査より、商品のはみ出し行為、前面の貸し借りの有無、時期、実行主体を把握した。

①はみ出しタイプより、中ノ門北側が商店によるはみ出しが多く、西門南側は路上店舗の分布が多いことがわかった。西門北側では、商店以外の建物からはみ出しはないが、建物前面の貸し借りは、各エリアで見られた。

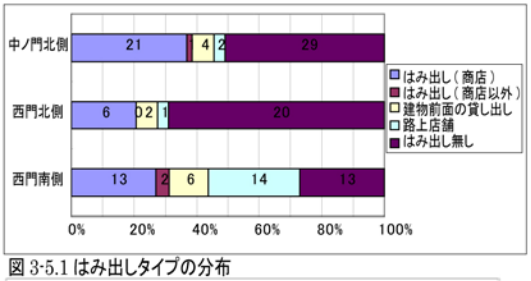

図 3-5.1 はみ出しタイプの分布

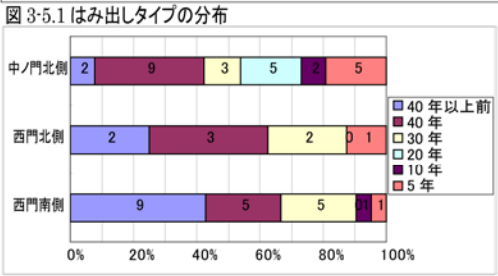

図 3-5.2 はみ出し時期

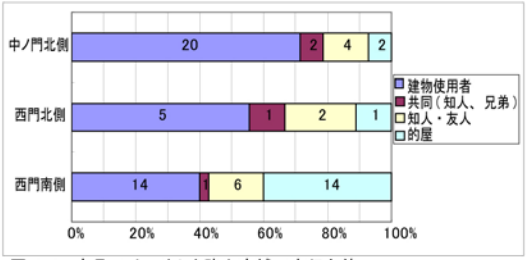

図 3-5.3 商品のはみ出しと路上店舗の実行主体

②はみ出し時期は、中ノ門北側は、40 年前からはみ出し行為をはじめた店舗が多く、また 5 年以内に商品をはみ出しはじめた店が多く、比較的新しいお店が入っている。西門南側では、40 年以上前からはみ出しを行っている店舗など、ほとんどの店舗が古い時期から商品のはみ出しを始めている

③実行主体については、中ノ門北側は、建物使用者によるものが多く、西門南側では、建物使用者と的屋が多い。これは、西門南側では、路上店舗の出店が多い為と考えられる。また、各地点で共同で商品のはみ出しを行う店舗が見られ、縁日時におけるはみ出し行為は、建物使用者だけでなく、その他に人々によって成立している。

3-6. まとめ

現在の四天王寺の参道の空間構成、業種構成の変化について、各エリアでまとめた。

①中ノ門北側

四天王寺夕陽丘駅ができてから、商品のはみ出しが増加しており、その実行主体は、ほとんどが建物使用者である。縁日において、中ノ門北側の業種構成は、「織物・衣服・身の回り品」「飲食料品」の増加が見られ、

四天王寺に関連した商品の増加は見られず、商店街に近い構成になっている。また路上店舗が少なく、最近になってはみ出し行為をする店舗も見られ、新しい参道と言える。

②西門北側

西門北側は、はみ出し行為を行う店舗が少ない。これは、西門と中ノ門に挟まれ、参詣者があまり通らないことが考えられる。しかし、古くから商品のはみ出しを行う店舗が見られ、日常的に商品のはみ出しが確認できる。これより、地下鉄の開通によって通行する参詣者が減ったが、商品のはみ出しを継承している店舗も確認できた。

③西門南側

商品のはみ出し時期が古く、実行主体も多様である。縁日において、西門南側の業種構成は、「飲食料品」「宗教用具」の増加が見られ、縁日において、四天王寺の参道として機能する店舗に変化している。西門南側は、ＪＲ天王寺駅から四天王寺へ参拝に来る人が利用しており、古くから参道となっていたことが分かった。

4. 結論

本研究は、縁日における四天王寺参道の沿道店舗、路上店舗とその実行主体との関係性から参道化の実態を明らかにすることを目的に、①中世から近世の四天王寺周辺の市街地の変容と参道空間の形成過程、②近代以降の四天王寺周辺の市街地と参道の変遷、③四天王寺の参道における空間変容、④道店舗と路上店舗の実行主体と商品のはみ出し時期の以上の①～④の結果を踏まえ、市街地形成と参道の変遷と縁日における四天王寺の参道の空間構成と業種構成の変化により、参道化の実態を明らかにした。

以上の①から④の結果を踏まえた結論は以下の通りである。

Ⅰ．四天王寺創立以降、西門信仰の隆盛により四天王寺周辺は常設的な建物と仮設的な建物によって参道空間は賑わっていた。近代に入り交通インフラの発達によって、明治期にできた通りが現在の参道となっているが、縁日時には沿道店舗による商品のはみ出しや路上店などの仮設店舗による賑わいが確認できることから、空間が参道化しているといえる。

Ⅱ．現在の四天王寺の参道は、古くから参道として使用されている西門南側の業種構成は、参道として機能する商品を扱う店舗の増加が見られ、日常と縁日において業種構成が転換しており、転換型の参道化といえる。また新しい参道である中ノ門北側では、日用品などの商品のはみ出しが多く、空間構成の変化は見られるが、参道としての機能を持った店舗の増加は見られず、商店街のような構成になっている。新しい参道は商店街の延長型の参道化をしているといえる。

本研究は、縁日時における四天王寺の業種構成、空間構成の変化より参道化の実態を論じており、今後は業種構成を特定することでより、日常と縁日における空間変容の詳細を論じる必要がある。

【補注】

(1) 特に中世から近世の調査では、1 次資料はではなく、歴史研究者によってまとめられた「近世大坂成立史論」(1987,伊藤毅),「四天王寺　第 1 巻」(1979,大谷女子大学資料館報告書),「四天王寺年表」(1927,棚橋利光),「天王寺区史」(1955,天王寺区役所),「新修大阪市史第 3･4 巻」(1889･1990,新修大阪市史編纂委員会)といった出版物等の 2 次資料を主に用いた。

(2) 地図は、新修大阪市史第 10 巻第 5 図「天保期の大坂三郷」をベースとして、文献・図絵から得られた情報を基に作成したものである。(尚、原図は大正 2 年発行の地形図に江戸期の古地図情報を落として作成されたものである。) 尚、文献からの文章情報と図絵による情報のみを基に作成しているため、その正確さに欠ける部分が大きい。各施設が四天王寺周辺に立地していたかどうかについてはほぼ正確であるが、各施設の数・正確な位置については正確なものとはなっていない。さらに、各図に記した用途以外の施設が存在した可能性も大いにある。

(3) 土地利用分析については、1956～2009 年までの住宅地図を用い、四天王寺の参道における土地利用の変遷を 10 年毎に分析を行った。対象地区としては、近代以降参道として使用されている①四天王寺中ノ門前北側（四天王寺一丁目)、②四天王寺西門前北側（四天王寺一丁目)、③四天王寺西門前南側（大道一丁目）の 3 地区である。

(4) 用途区分に関しては、日本標準産業分類（昭和 26 年政令第 127 号 2 条の規定に基づき、昭和 26 年 4 月統計委員会告示第 6 号の一部を改定した）を基に、集約して編成したものである。ここでは、四天王寺の参道の土地利用変遷を把握する為に、産業中分類を行った。また、テナントビルなど、一つの建物に複数の用途が入っている場合は一階面の用途を採用した。

(5) 調査日時は、2010 年 8 月 21 日（縁日）および 8 月 28 日（日常)、2010 年 12 月 21 日（縁日）および 1 月 18 日（日常）に実施した。

(6) ヒアリング調査については、1 月 15 日から 20 日の 6 日間に、対象地区に面している建物の 1 階面建物使用者に行った（70 件)。ヒアリング調査の項目は、/ 商品はみ出しの有無/ 日時/ 業種/ 動機/ 実行主体/である。

【参考文献】

1) 海道清信（2007)「コンパクトシティの計画とデザイン」p3 株式会社学芸出版
2) 伊藤毅（1987)「近世大坂成立史論」p110 生活史研究所
3) 大谷女子大学資料館報告書（1982)「四天王寺　西門とその周辺」p75
4) 大澤研一（2001)「研究紀要第 33 冊　中世大坂の道と津」pp3-7 大阪市立博物館
5) 前掲書 2)PP109-111
6) 前掲書 2)PP112-113
7) 前掲書 2)PP116-121
8) 新修大阪市史編纂委員会（1990)「新修大阪市史第４巻」p552
9) 前掲書 8) pp552
10) 川端 直正編（1955)「天王寺区史」pp127-135
11) 前掲書10)PP174-176

討　議　等

◆討議［　横山先生　］

何の為の研究なのか？実態として、歴史的な変遷、業種の変化などをみているが、そこから何を言おうとしているのか。参道化に着目することで何が言えるのか。

◆回答：市街化によって消失する参道が多い中、四天王寺の参道は、周辺の住民が意識して商品のはみ出しを行っているわけではないが、暗黙の了解のうちに形成されている賑わいを把握することで、市街化によって見えにくくなった地域のアイデンティティを再認識でき、これからの都市の賑わいを考える上で重要になると考えている。

◆討議［　横山先生　］

賑わいと言っているが、四天王寺の参道では賑わいという実態をどういう風に捉えているのか。

◆回答：ヒアリングにより商品のはみ出しの動機を把握したが、今回はこの研究に反映させることができなかった。このヒアリング結果により、周辺の住民は、参道を意識して商品のはみ出しをする人もいれば、売買目的のみではみ出しを行っている人もいる。

◆討議［　内田先生　］

店の前に不法占有で、ワゴンを出したり商品をだしたりとしているが、それは商店街でも見られる。参道化とそういった商店街での商業的な行動と何が違うのか。

◆回答：参道化と商店街のはみ出しでは業種構成が違う。一般的な商店街の業種構成は、商品のはみ出しによって変わらないが、参道化は縁日のときになると業種構成が変化して、違った商品を出す。専有住居に住んでいる人が、商品のはみ出しを行うことは、商店街には見られない珍しい行為だと言える。

◆討議［　横山先生　］

賑わいと言うなら、例えば普通のお店じゃなくてテンポラリーな商品のはみ出しに着目し、縁日の時とそうでない時の人の動きの違いであるとか、縁日の時しか見られない設えがあって、それが人の動きとか、気持ちとかにどういった影響を与えるのかということ、込み具合などが賑わいに繋がっていくとか、実際に観察をして、どういったことが賑わいを繋がるのか考える必要がある。

◆討議［　内田先生　］

四天王寺の参道は賑わっているとは思えない。なぜ四天王寺なのか。四天王寺は賑わい空間の中でどういった位置づけがあるのか。例えばあびこ観音との違いは何なのか。そういったことを結論で言う必要がある。

◆討議［　内田先生　］

この研究を踏まえて、新しくテーマをあげるとしたら、どうするか。

◆回答：今回の研究は、四天王寺の位置づけは、しっかりとした参道と、あびこ観音のような参道の中間に位置しており、参道の業種構成をより明確化することで、この四天王寺の参道化の実態を一般化する。この実態が明らかになれば、市街化によってなくなりつつある参道の評価ができるのではと考えている。